

カント哲学をサイエンス・フィクションで語る

—クルト・ラスヴィッツ (Kurd LaBwitz 1848-1910) の小説

『二つの惑星の上で (Auf zwei Planeten)』(1897) における時間旅行¹

徳永菜摘野

序

カントの歴史哲学や自然哲学²、道徳哲学の真理を理解することは、19世紀末から20世紀初頭のカント哲学や自然科学の専門家ではない読者、つまり教養市民や大衆にとって到達困難ないし到達不可能な課題であった。しかしそうした読者にも、学問的真理に間接的に触れる機会があった。ここでいう学問的真理との間接的な接触とは、真理それ自体ではなく、真理と真理以外のものとの混合物³、すなわち通俗科学との接触である。通俗科学を提供することで、哲学や科学の真理と読者とを仲介したのが科学ジャーナリズム、つまり科学をその内容を変えずに形式を変えることで、読者にわかりやすく伝える新聞記事、科学雑誌、科学的な実用書等のメディアであった。科学ジャーナリズムの中でもとりわけサイエンス・フィクション(以下、SFとする)は、この文学ジャンルが真理の生産を目的としていないという点で⁴、科学の真理と読者とを仲介する機能を果たすのうってつけであった。なぜなら、SFは科学的真理とフィクション—それはたいてい読者に理解しやすい比喩や具体例を伴うエンターテイメントである—との混合物を提供するが、この混合物が非真理、すなわち虚偽であると非難される心配はないからである。

1. 大衆迎合的歴史観の形成

ラスヴィッツは科学ジャーナリズムの中に自らの社会的機能、すなわち科学による啓蒙を見出したドイツのSF作家である。この作家の代表作『二つの惑星の上で』は次節で詳述するように、時間旅行が重要なモチーフとなっている。そこで本論がテーゼとするのは以下の点である。本作品の時間旅行は、カントの歴史哲学や自然哲学、道徳哲学の真理と、読者の日常生活レベルにおける科学

技術的進歩の実感とをSFとして混合することで、大衆迎合的な歴史観の形成を促している。ここでいう大衆迎合的な歴史観とは、とくにヘーゲルに代表される19世紀歴史主義と、ダーウィン、ハクスリー、ヘッケルの進化論、ゴルトンの優生学とを端緒とする、社会ダーウィニズムをも含めた社会進化論が、上述の科学ジャーナリズムを仲介として専門家集団から大衆にまで一むろん専門家集団が生産する真理と非真理との混合物として一浸透していった右肩上がり歴史観、つまり明日は今日よりも良くなるという進歩的楽観主義的歴史観である。西洋は1840年代、すなわちヘーゲルの歴史主義を境に、それ以前のキリスト教的歴史観、より詳しく言えばキリスト教勃興期やヘレニズムを起源とする、理想郷である失樂園から最後の審判へと至る黙示録的、過去肯定的歴史観から、現在や未来を肯定する進歩史観へと、エピステーマーにおける大きな不連続を経験したのであった。カントの歴史哲学はこの不連続以前に、歴史における人間の自由意志により、すでに19世紀の新しい歴史観を準備していたのである。

本作の社会的機能を論じるためには、この作品の社会での受容を前提としなければならない。シュワイカート⁵によれば、本作のヨーロッパにおける初版二巻本の発行部数は1897年の一年間で2000部、十年間で8000部である。以上の数字が示すように、この作品は初版から以降十年間、ヨーロッパでそれほど大きな反響を呼ぶことはなかった。しかし、第一次世界大戦勃発に伴い、フランス人ジュール・ベルヌの空想科学的冒険小説がドイツ国内の出版市場から排除されたことで、1917年にドイツ国内での『二つの惑星の上で』の発行部数は急激に上昇した。1917年から本作がナチス政権により禁書となる1930年までの発行部数は3万部であり、1897年から1930年までの発

行部数は7万部である。1908年から1916年までと1917年から1930年までの発行部数がほぼ同数であることから、第一次世界大戦後、この作品の読者層は衰退する教養市民から大衆へと移行したと推測される。P. フィッシャーはワイマール時代の典型的なベストセラーの基準について、5万部から20万部としている。⁶この基準に従えば本作は作者の没後、控えめながらベストセラーとなったといえる。大衆作家になることが作者の意図ではなかったとしても、本作は大戦を機に大衆文学として受容されたのである。

2. 時間旅行のモチーフ

本節では本作品における時間旅行のモチーフがラスヴィッツ独自の創作であるのではなく、あくまでカントの歴史・道徳・自然哲学に立脚している点を明らかにする。本作では、地球と火星という二つの惑星が空間的にも時間的にも隔てられている。時間的な隔たりとは、火星文化が地球文化から科学技術史的に、数百万年進んでいるという設定を指す。両惑星間の空間的な移動と時間的な移動との同義性は、すでに先行研究で指摘されているが⁷、カント哲学との関連が指摘されていない。この空間的時間的な舞台設定ならびに両惑星の住人の身体的、精神的諸特徴は、カントが1755年に刊行した論文『天界の一般自然史と理論』の第三部「自然の類比に基づいてさまざまな惑星の住人を比較する試論」と一致する点が多い。⁸この試論の中でカントは、のちにカント＝ラプラスの星雲説として知られるようになる、機械論的宇宙生成説を論じ、太陽系の諸惑星が太陽から離れば離れるほど古く、また太陽系の諸惑星の生物の精神的、物理的完成度は太陽から離れば離れるほど高い、とする法則を提出した。そしてカントはこの法則から、地球よりも太陽から遠い火星、木星、土星において、地球人よりも高等な理性的生物の存在を導き出した。

両惑星の身体的、精神的な違いはカントが『天界の一般自然史と理論』で言及した法則に従っている。すなわち身体面では、火星人の外見は美しく、繊細な感覚を備え、大きな両眼で暗闇でも物

を見ることができ、地球人の約二倍の寿命を持ち、地球の重力比三分の一の火星重力下では軽快で優雅な身のこなしが描写される。一方、地球人の感覚は鈍感で、火星重力下での身体動作は低重力環境に慣れないうちは滑稽なほどぎこちない。さらに火星人の精神はカントの三批判書に従って造形されている。火星人は『純粹理性批判』（1781、1787）が問題とする人間の認識能力としての感性的直観ではなく知性的直観によって客体を認識し⁹、『実践理性批判』（1788）で言及される倫理的義務と実践的自由に基づく道徳法則に従って行動し、『判断力批判』（1790）第一部における目的を持たない美的合目的性を有する。要するに火星人は知性的な、高等な存在であるのに対し、地球人は感性的な、下等な存在、火星から見て野蛮人として区別されるのである。

次に本作の両惑星の文化、社会的差異がカント歴史哲学に即して造形されている点を指摘する。『人間の歴史の憶測的始元』（1786）でカントは「歴史の進行過程において自然から逸脱し、自然と対立した人為技術、文化を、その完成の域において、ふたたび自然と合致させること（すなわち自然素質の全面展開としての全人類の道徳的開花）が人類の使命」¹⁰であるという文脈で「完全な技術がふたたび自然となる」¹¹と述べる。作品において、両惑星の文化的発展の差異を図る基準として最も明確かつ頻繁に引き合いに出されるのが科学技術の度合いである。火星の科学技術の例としては、宇宙船、宇宙ステーション、飛行船、重力変換装置、光線通信、過去再生装置等が挙げられるが、これらの火星技術は現実において、読者が欲望する技術の未来を反映している。しかし本作品では盲目的な技術革新の危険性も仄めかされている。対地球政策を巡り分裂していた火星の世論や党派間の争いも、火星人の飛行船を地球人の攻撃からどのように防御するかという課題を前に技術革新推進で一致する。ここでは技術的課題の克服は火星人の名誉に関わる問題だとされる一方で、技術革新が道徳面から議論されることはない。（Vgl. 347）その結果、生み出された新しい飛行船が地球侵略戦争に導入され多数の犠牲者を

出すというプロットを考慮するならば、科学技術の軍事化が次節で取り上げる人間の悪の一例となっている。

3. 永遠平和をめぐるカントの二枚舌と『二つの惑星の上で』における世界平和

『二つの惑星の上で』の最終章は「世界平和(Weltfrieden)」という章タイトルが付けられている。最終章の内容は以下のとおりである。火星人の圧政に苦しむ地球人の一部が火星人に反逆し、休戦協定が結ばれる。火星では火星国家連合中央委員会の選挙戦で親地球派が勝利し、地球へ和平条約締結のための使節団が派遣される。火星使節団の指導者の自己犠牲により使節団は地球に到着することができ、両惑星は「世界がいまや自由と平和へ転換することのできる道 (dem Wege, den die Welt nun wandeln kann zu Freiheit und Frieden)」(607)を共に歩み始める。この結末は、先行研究においてナイーブな進歩主義、楽観主義という評価がされてきた。¹² そうした見解に対し、本稿が主張したいのはラスヴィッツがカント歴史哲学、つまり永遠平和をめぐるカントの矛盾する真理と、科学による啓蒙という自らの作品の社会的機能とを天秤にかけた結果、後者を意図的に選択したのであろう、という点である。言い換えれば、科学による啓蒙をラスヴィッツが目的としていた以上、彼はカントの矛盾する真理を読者にそのとおりに伝えることはできなかったのである。

永遠平和をめぐるカントの矛盾する真理とは以下のように説明される。確かにカントは『永遠平和のために』(1795)や、『実用的見地における人間学』(1798)などで、永遠平和すなわち最高善へと努力することの重要性を繰り返し説いている。その一方で、カントは永遠平和の実現が不可能であることも主張しているのである。カント研究では、「永遠平和のために」というタイトル自体が「死してここに永眠す」という墓碑銘の転用であって、カントはこれによって人類の死滅に対する警鐘を鳴らしている、という解釈が一般的になされている。¹³ また『人倫の形而上学』(1797)

「世界市民法」で、カントは「永遠の平和はおそらくありえないにしても、ありうるかのようにわれわれは行動しなければならない」¹⁴と述べている。以上のように、カントは大真面目に永遠平和の実現を信じ、それを主張しているわけではない。

ラスヴィッツは永遠平和をめぐるカント歴史哲学の矛盾する真理を、永遠平和へと自らを高めていく地球人と、人類の死滅へと墮落する火星人によって暗示している。両惑星住人の相反する精神的運動は、すでに触れた『天界の一般自然史と理論』第三部においてカントが「空想の草原」¹⁵と呼ぶ推論を下敷きに行っていると推測される。この推論においてカントは、地球と火星の住人がこの二つの惑星が太陽からの距離に関して、空間的に太陽系の中に位置することから、太陽系の諸惑星の道徳的な序列においても同等のレベルにあることを指摘している。地球人と火星人はその精神を最高善へと引き上げることもできるが、墮落する可能性もあるのである。

地球人は火星人の来襲と圧制という外圧を受け、国境や人種を超えた連帯に目覚める。この連帯はカントによれば永遠平和への第一段階である国家連合創設へと発展していく兆しを見せている。一方、火星人の初期対地球政策は、地球のエネルギー資源開発による火星の経済的利益の獲得と、火星の道徳法則(すなわちカントの道徳法則)の教化による地球人の幸福追求推進という二つの目的を掲げていた。しかし地球人が火星の道徳法則を解さないゆえに、この道徳法則を条件とする幸福を地球人が享受することはない。かくして第二目的は失敗し、火星人は地球人の人格を否定し、地球人をエネルギー資源開発の単なる労働力とみなすことでもっぱら第一目的遂行に専念する。このとき、火星人は他人を手段としてのみ利用することを禁じる、カントの定言命法の第二定式に抵触する。カント哲学の翻訳者である中山によれば、カントの道徳哲学において最も重要な考察の対象は人間の偽善である。作中では対地球政策を巡り火星人の偽善が徐々に明らかとなり、最終的に反地球派指導者が提唱する「地球自転ブレーキ(“Erdbremse”）」(598, 606)計画が人類滅亡

を準備する。この計画はカントの小論文『地球自転論』（1754）¹⁶から着想を得たものと推測されるが、科学技術により地球の自転を人為的に停止させることで、人類を含む地球上の生命体の生存環境を破壊するというものである。しかし火星国家連合中央委員会選挙での親地球派の大勝利により計画実行は回避される。さらに火星人は地球人の人格を認め、両惑星間の対等な関係を前提とする平和条約締結を望む。この箇所では強調されるのは、火星人と地球人、すなわち未来の人間と、現在の人間という二種類の人間の相互的肯定である。カント歴史哲学では、人間は最高善を目指して常に自己発展していくため、現在の人間が将来の人間よりも劣っているのだが、にもかかわらずいつの時代の人間に対しても道徳法則に従い、絶対的で普遍的な価値が与えられる。なぜなら最高善の実現が不可能である以上、どの時代の人間も必ず悪を持つのだが、カントはこの悪こそ人間に善を選択する自由を与えると考えるからである。¹⁷しかし現代人の価値を肯定しつつも、カント哲学の力点はあくまで絶え間ない自己克己・自己反省と偽善に対する問題意識にあった。『二つの惑星の上で』における火星からの平和の使者の自己犠牲と平和条約締結という結末は、カントの道徳・歴史哲学の矛盾、つまり「究極目的への無限の前進という表象はじつは同時に諸悪の無限な系列を予想することでもある」という点への言及を避けつつ、永遠平和の実現可能性のみを読者に印象付けるのである。

結 論

『二つの惑星の上で』はカント哲学の真理と時間旅行のモチーフから成るフィクションが混合された、SF である。地球人と火星人が未来の最高善を目指し共同で努力する姿を描いた同書の結末は、読者にカント哲学の片面、すなわち永遠平和の実現可能性を印象付ける一方、カント哲学の別の面、すなわち永遠平和の実現不可能性を覆い隠している。ここで本作を科学ジャーナリズムの社会的機能、つまり科学による啓蒙という観点から検討するならば、時代と本作品の連動を指摘する

ことができる。なぜなら、永遠平和の実現可能性のほうが永遠平和の実現不可能性よりも時代の主潮、すなわちヘーゲル歴史哲学に代表される右肩上がりの歴史観に適合し、ゆえに大衆の意向に沿っているからである。ラスヴィッツはカント哲学を自身の時代の歴史観と科学に従って語り直すことで、カント哲学そのものではなく、カントの通俗哲学を仲介したのだが、それを彼は真理生産を目的としない SF という形式においてのみ十全になしえたのであった。

テキスト

Lasswitz, Kurd: *Auf zwei Planeten*. Roman in zwei Büchern (Kollektion Lasswitz. 1. Abt. Romane, Erzählungen, Gedichte; Bd. 4/5) Dieter von Reeken (Hg). Lüneburg (Dieter von Reeken) 2009. なお同書から引用する際は、引用後に括弧付でページ数のみを示す。

『カント全集』全 23 巻, 岩波書店, 2000-2006. なお同書を引用ないし参照する際は、巻号とページ数のみを示す。

【注】

- 1 本稿はゲルマニスティネンの会 2018 年関東支部研究発表会での発表「カント哲学による壮大な思考実験—クルト・ラスヴィッツ『二つの惑星の上で (*Auf zwei Planeten*)』(1897)の身体に注目して」を加筆・訂正したものである。
- 2 犬竹は、カントの生きた時代に自然科学と自然哲学とが「ほぼ同義的な表現」であった点を指摘する。(『カント全集別巻』322 頁) 一方、ラスヴィッツの生きた時代では、自然科学と自然哲学との分離が完了していた。ラスヴィッツはカントの自然哲学を『二つの惑星の上で』にほぼ無批判に取り入れる一方、カントの自然科学に関しては、ラスヴィッツにおける現代の自然科学の見地から修正を施している。
- 3 バルトは真理と真理以外の混合物を「神話(myth)」と呼ぶ。バルトによれば真理(非神話)と神話とを分け隔てるものは、それらの内容ではなく、それらの「語りの形式(type of speech)」である。(Barthes, Roland: *Mythologies*. Selected and translated from the French by Annette Lavers. London (Paladin Books) 1973 (c1972) p. 109.) 原の上述のバルト理論を応用した表象文化論によれば、「現代科学も神話的に語られうるのであり、つまりは神話になりうる」。(原克 『図説 20 世

- 紀テクノロジーと大衆文化』柏書房, 2009, 10 頁.)
- 4 フーコーによると、文学は言説と異なり必ずしも真理を生産するものではない。Vgl. フーコー, ミシェル『フーコー・コレクション 2—文学・侵犯』「外の思考」(小林康夫, 石田英敬, 松浦寿輝編) 筑摩書房, 2006, 307-353 頁.
 - 5 Schweikert, Rudi: Anmerkungen u. Nachwort. In: Lasswitz, Kurd: Auf zwei Planeten. Roman in zwei Büchern (Haidnische Alterthümer. Literatur des 18. und 19. Jahrhunderts. Aeronautics in literature) 2. Aufl. (1. Aufl. 1979) Frankfurt a. M. (Zweitausendeins) 1984, S. 1069.
 - 6 Fischer, Peter S.: Fantasy and Politics. Visions of the future in the Weimar Republic. Madison, Wis. (University of Wisconsin Press) 1991, p. 233.
 - 7 W. B. フィッシャーは、「空間を通過する旅行と時間における進歩の等価というコンセプト」(Fischer, William B.: German Theories of Science Fiction: Jean Paul, Kurd Lasswitz, and After. In: Science Fiction Studies 3. Greencastle, Indiana (DePauw University) 1976, p. 259)、「空間を通過する旅行と時間における進歩との可視的な等価性」(Fischer: The Empire strikes out : Kurd Lasswitz, Hans Dominik, and the development of German science fiction. Bowling Green, Ohio (State University Popular Press) 1984, p. 63)を指摘する。またユストも、前人未到の新しい空間、つまり地球の極に、まだ見ぬ新しい未来、すなわち火星人の基地が体现する高度な科学技術と道徳的社会が存在することから、空間の移動が時間の移動に等しいとしている。(Just, Klaus Günther: Aspekte der Zukunft. Zwei Essays. Francke-Drucke 10. Bern (Francke) 1970, S. 57) ユストは同様の箇所でも、「地球と火星のほぼ線上にせばまった空間の中でラスヴィッツは未来の科学技術を根付かせることができた」と指摘するが、この時間の空間的配列は中山が解説するカントの「直線としてイメージされた時間の系列」に一致する。カント, イマヌエル『純粹理性批判 3』(中山元訳) 光文社, 2010, 363 頁.
 - 8 ラスヴィッツは 1902 年および 1905 年に出版されたアカデミー版カント全集『前批判期論集 I. 1747-1756』と、同全集の『前批判期論集 II. 1757-1777』の刊行に携わった。(Schweikert: 1984, S. 1086 ff.) このことからラスヴィッツは『天界の一般自然史と理論』を含むカントの前批判期における自然哲学的テキストに精通していたと推測される。
 - 9 作中では知性的直観を備えた火星人は火星語でヌーメ(単数形 Nume, 複数形 Numen)、火星語で「火星人の理性の理想 (Vernunftidee der Martier)」(81) はヌーメン性 (Numenheit) と呼ばれるが、これらの造語はカント哲学において、知性的な直観の客体である叡智的な存在 (Numenon) が語源であろう。またヌーメン性を打ち立てた偉大な火星人哲学者はイム (Imm) (53) というが、これはカントの名 Immanuel の仄めかしである。
 - 10 『カント全集 14』339 頁.
 - 11 Ebd., 105 頁.
 - 12 Vgl. Hillegas, Mark R.: Martians and Mythmakers. 1877-1938. In: Browne, Ray R. (Hg.): Challenges in American Culture. Bowling Green, Ohio (State University Popular Press) 1970, p. 158; Fischer, William B.: 1976, S. 259; Guthke, Karl S.: Der Mythos der Neuzeit. Das Thema der Mehrheit der Welten in der Literatur- und Geistesgeschichte von der kopernikanischen Wende bis zur Science Fiction. München (Bern) 1983, S. 336; Schweikert, Rudi: 1984, S. 964; Schweikert, Rudi: Am Anfang war der Höhepunkt: »Apoikis« von Kird Laßwitz als literarisches Kabinettstück aus der Frühzeit deutscher Science-fiction von A bis O unter die Lupe genommen. In: Polaris 8: ein Science-fiction-Almanach. Franz Rottensteiner (Hg.) (Suhrkamp Taschenbuch, 1096) (Phantastische Bibliothek, Bd. 143) Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1985, S. 174; Wenzel, Dietmar: Kurd Laßwitz. Prophet des Bürgertums. In: Science Fiction Times 27. 2. Meitingen (Corian) 1985, S. 16, 2. Spalt.
 - 13 『カント全集 15』361 頁 訳注 (1) と 534 頁 (解説) を参照。
 - 14 『カント全集 11』2002, 204 頁.
 - 15 『カント全集 2』168 頁.
 - 16 『地球自転論』の中でカントは、地球の海洋の潮流が地球の自転と逆向きに動くことで、地球の自転運動を徐々に減速させ、やがては地球の自転を完全に停止させると主張する。『カント全集 1』215-223 頁.
 - 17 カントの善悪の思想は、本作において地球の天文学者の嘆きに最も顕著に表れる。この天文学者は、火星から差し出される善 (道徳法則) を拒絶しなければ、自由を得ることができない地球人の悪と、地球人に善行を施そうとしてかえって地球人から自由を奪ってしまう火星人の悪を指摘し、次のように語る。„[...] ist es unser tragisches Schicksal, daß wir uns auflehnen müssen gegen das Gute! Und es ist das tragische Geschick der Nume, daß sie um des Guten willen schlecht werden müssen!“ (445)
 - 18 『カント全集 14』239 頁.